



Women's Sports Foundation Japan

WSF Japan News

'99 October Vol.38

- Mail Box / 前略 会員の皆様へ 三ッ谷洋子…2
- Interview / 日本女子ラグビーを支える 岸田則子さん…3
- Women's Sports / 女性スポーツの現在 萩裕美子…6
- Report / シニアと一般体操活動 松本迪子…7
- Column / 女子がカバーする日本レスリング界 福田富昭…8
- Enjoy Sport! / 組織作りがキッカケでクレ射撃のシューターに 伊藤澄子…8
- Hot Line / 会員の広場…9
- Topics / 各紙掲載記事より…10
- Information / 事務局だより…11



Mail Box

前略 会員の皆様へ〈第10信〉

WSFジャパン代表

三ッ谷洋子



私たちのWSFジャパンがお手本としている米国WSFは1974年設立で今年、25周年を迎えます。今号11ページ「インフォメーション」の欄でもお伝えしましたが、例年の表彰ディナーに加え、25周年を祝っての特別企画も盛り込まれています。WSFジャパンは今年で18年です。今回はふた昔前の設立当時のエピソードを、お伝えしたいと思います。

~~~~ あれから19年 ~~~~

1980年の年明け早々、私は内外の著名女性スポーツ選手による国際シンポジウムの開催を思いつきました。その前年、第1回東京国際女子マラソンが行われました。それまで男性にとっても過酷な種目といわれていたマラソンに、無名のランナーを含む50人の女性が挑戦し、途中棄権はたったの4人という結果に、女性スポーツのイメージは180度、変わりました。「弱い女性にマラソンなど無理」と思っていた私たちの常識は、覆されました。

「女性にとって過酷なスポーツとは何なのか」「女性がスポーツをする上で、何が障害になっているのか」「女性スポーツの発展のために、女性の役割は何なのか」次々に疑問が浮かびました。そして「そんなことを考える団体、例えば米国のWSFのような組織が、日本にできていいのではないか」という結論に至りました。そのキッカケとしての国際シンポジウムです。

友人の尽力で中堅広告代理店の協力を得、スポンサーも見つかりました。わずか半年余りで準備を整え、80年の10月9日、体育の日の前日に第1回国際女性スポーツ会議を開催しました。内外7人のトップ・スポーツウーマンが壇上に並びました。体操のベラ・チャスラフスカ(チェコ)、陸上のエベリン・アシュフォード(米国)、テニスのバージニア・ウェード(英国)、スキーのアンネマリー・モザー・プレル(オーストリア)に加え、日本からは登山の今井道子。国も種目も異なる女性たちの共通

テーマは「女性(自分自身)とスポーツ」です。スポーツ選手(元選手)によるシンポジウムは日本で初めてのことでした。会場の東京・日比谷のプレスセンターホールは、開設以来という大勢の取材陣が殺到し、450人の参加申し込み枠は満杯。最後は断わらなければならないほどの盛況ぶりでした。チャスラフスカなど話題性のある華やかなパネリストを招待したことで、スポーツ関係のマスコミだけでなく、テレビのワイドショーや女性雑誌などがこぞ取り上げ、広告業界ではユニークなイベントの一つとして高く評価されました。

~~~~ 「愛情と努力」はあるか ~~~~

世間の目を引くことには成功しましたが、イベントが終わってしまえば、何も残りません。シンポジウムを成功させたからといって、女性スポーツの組織が、自然発生的にできるわけでもありません。「女性の視点」などという、男女に関係なく大方の人が怪訝な表情を見せる時代でした。日本では、まだ女性が社会に向かって何かを訴えるような行動は、歓迎されませんでした。

それでも翌81年の暮れ、WSFジャパンの設立を決めました。とりあえず私が「代表」となり、現在に至っています。組織の発展のために、有名人に“看板”になってもらう方がいいのではないかと、迷うこともあります。そんな私の目に、先人の言葉が入ってきました。

「大きな仕事を成し遂げるのに最も必要なのは必ずしも才ではなく、むしろ多くの場合、物に対する愛情と努力です」。7人の一流人物の回顧談をまとめた『現代の覚者たち』という書物の中で、当時87歳の元京大学長・平澤興が、91歳の哲学者・森信三(ともに故人)を相手に語っている一節です。雑誌『選択』からの孫引きですが、実際に「大きな仕事をなし遂げ」、また人生を長く生きた人物の晩年の言葉として、しみじみかみしめ自問しています。

Interview

日本女子ラグビーを支える

~~~~~ 岸田 則子さん



●岸田 則子(きしだ のりこ)さん 写真撮影/氣賀恭子

今年、発足12周年を迎えた日本女子ラグビーフットボール連盟。その設立の中心となり、現在も日本の女子ラグビー界発展のために奔走している専務理事の岸田則子さんに、活動の歴史や女子ラグビーの現状について伺いました。

◇

### 》立ちだかる“男性の壁”《

—日本女子ラグビーフットボール連盟はすでに10年以上という歴史があるわけですが、組織を作られたきっかけをお聞かせください。

「日本で女性がラグビーを始めたのは1980年頃からだと思います。ラグビースクールに通っている子供たちが試合や遠征に行く際、つき添っていた母親たちが『どうせなら自分たちも見ていただけでなく、試合ができれば』ということから始まったようです。そして83年に、私がいたラグビースクールがある東京と、名古屋、松阪で正式にチームが結成され本格的に女子ラグビーがスタートしました。

活動が盛んになるにつれて試合をする機会も増えてきましたが、チームが少ないと遠くまで遠征しなければならず、財政的負担も大変です。そこで全国にたくさんチームを作りたいと思い、その拠点として『日本女子ラグビーフットボール連盟』を発足させました。88年の4月です」  
— 周りの反応はいかがでしたか。

「当初から、マスコミの取材などは結構ありました。86年に男女雇用機会均等法が施行され、それに絡めた取材というのもありましたが、それ以外はほとんど興味本位のものばかりでした。スポーツとしてのラグビーではなく『女の格闘技』などと取りあげられ、スクラムの後ろからお尻の写真を撮られたり、今ならセクハラまがいの行為もありました。そんなマスコミに対し、きちんとスポーツとして捉えてほしいと思ったのも女子連盟を作った理由の一つです。

1946年3月18日、東京生まれ。成蹊大学政治経済学部卒業。大学時代はテニス部のキャプテンを務める。『日本女子ラグビーフットボール連盟』には発足からかわり現在、専務理事。選手としても現役で、所属チーム「リバティーフイールズ」ではFW。週一回の練習はもちろん、筋力トレーニングも欠かさない。同じ大学出身の夫はラグビー部のキャプテンだった。2男は既に独立。

◆◆◆◆

また(ラグビーの統括組織である)日本ラグビーフットボール協会としては、ずっと、女性のラグビーは危険なので認めないという姿勢でした。それならば、自分たちで実績を作っていくということもありました」  
— 数あるスポーツ団体の中でも、保守的といわれるラグビー界では、その他にもいろいろとご苦労があったのでは。

「男性との摩擦はずっとありました。女子連盟の主導権は誰が持つのが問題でした。私が最初に選手として入った世田谷レディースというチームは、世田谷ラグビースクールの女子の部でした。そこから有志が女子の連盟を作ろうと立ちあがりましたが、その時スクール側からクレームが出ました。スクールの男性関係者を組織の中核に入れないというのはおかしいというのです。組織としてちゃんと体裁を整えなければならないと。私たちとしては男とか女ではなく、実際に仕事のできる人で構成したかったのです」

— 自分たちの考えとおりの組織を作りたかったということですね。

「でも私たちのチーム、世田谷レディースは女子連盟に入れませんでした。スクール側が女子連盟の不備を指摘して、加盟を認めなかったからです。その後もスクールと女子連盟の確執はなくなり、89年4月に、私はスクールには必要ないと、チームをやめさせられました。一緒に女子連盟の活動をしていた別のチームの人もやめさせられました」

—その後、女子連盟の運営はどうなったのですか。  
「スクールのやり方について行けないという人たち15～16人がやめ、あらたにリバティフィールズというチームを作りました。現在、私が所属しているチームです。女子連盟の運営も一緒に移りました」

## 》W杯出場の第一関門は 周囲の説得《

—世界の女子ラグビーの動きは、どのようになっているのでしょうか。

「海外では1970年代から始まっています。ニュージーランド、アメリカ、イングランド、カナダ、オーストラリアなどが強いですね。アジアでは香港が強い。7人制ではシンガポール、タイ、中国なども強いです。イングランドでは競技人口が1万人以上います。アメリカも1万3,000人。あの小さなスコットランドでも1,500人います。日本は現在400人程度です。」

男子のラグビーW杯（ワールドカップ）がいま話題になっていますが、女子のW杯も開催されていて、去年は第3回の大会がオランダでありました。日本は第1回大会（91年、ウェールズ）と第2回大会（94年、スコットランド）に出ています。



▲オランダのクラブチームと対戦（コートラド）

第1回の大会はイングランドの女性の組織が中心になって開催しました。2回目は、オランダの予定だったのですが、国際的な組織のIRB（International Rugby Board）が支援をしないということで、急きょスコットランドになりました。3回目からはIRBが本格的に支援をするようになりました。でも、実際の運営は開催国のオランダの女性が中心になってやっていたようです。

IRBの中には女子委員会がありイングランドやカナダ、アメリカの女性が委員として入っているはずですが、世界的にはそれなりに女性のラグビーも発展してはきています。しかし、日本の場合は近くに試合のできる国が少なく対戦数が限られるので、陸続きのヨーロッパ諸国のようにはいかないところがあります」

—個人また組織として、男性にはないハンディを感じることはありますか。

「例えばW杯へ行く場合、男性はみな企業チームや大学のチームに属している。女性の企業チームはゼロ。ほとんどがクラブチームなどでプレーしています。大学で女子チームがあるのは日本体育大学だけ。W杯に行くために家族や会社に理解してもらい、2週間休みを取るのは大変なことです。場合によっては仕事をやめていかなければならない。」

女子連盟の会員の中には、W杯に出場するのが目的でやっていたわけではないと退会したり、選手の高齢化などで現在、会員が減ってきています。結婚や出産をやめたり、仕事の関係で続けられなくなったりする人もいます。ラグビーに限らず、女性がスポーツを続けていくためにこういう点がもっと改善されればよいと思います」

## 》肩書きだけの役員はいらない《

—岸田さんがラグビーを始めたきっかけは。

「ラグビー雑誌で世田谷レディースの記事を見たのが直接のきっかけでしょうか。大学ではテニスをしていましたが、テニスコートに行くとき、グラウンドでラグビー部が練習をしているのが見えました。おもしろそうなスポーツだなと、学生の時から興味はありました。それにボーイフレンド（現在は夫の成器さん）がラグビーをやっていてキャプテンだった。一回はやってみたいと思っていました。」

世田谷レディースで始めたのは37歳の頃でした。周りからいろいろ言われました。そんな年からラグビーなんかやらなくてもとか、いい年してとか。当時、中学生だった2人の息子も、直接は言いませんでしたが、母親がラグビーをするなんて恥かしいことだと思っていたようです。

息子たちは当時、サッカーをしていましたが、夫の影響もあってその後、ラグビーを始めました。社会人になった今でもやっています」

—現在、女子連盟としてどのような活動をしているのですか。

「まず第一に普及活動です。年に1回、関東と関西で初心者講習会を開いています。企業のグラウンドを借りています。集まるのはだいたい30人くらい。その中で継続

してラグビーをするのは1割程度。もっと場所や回数を増やせばよいのですが……。なかなか条件が合いません。でも、企業も場所を提供したりコーチの派遣をしたりと、以前に比べずいぶん協力してくれます。」

これと並行して、指導者やレフェリーの養成もやっています。レフェリー講習会は年1回です。現在、公式な大会でレフェリーのできる人が2人います」

—そのような女子連盟の活動に対して、日本協会の対応はどうなのでしょう。

「組織をこのままの形で日本協会に入れてほしいと要望を出しているのですが、まだ認められていません。93年に協会の関連団体として認められ、資金を援助してもらったり、コーチを派遣してもらったりはしていますが。」

日本協会の人々が女子連盟をコントロールすることになると、現在の運営体制は崩れて、各地域ごとの管理になってしまうことが懸念されます。例えば日本協会が女子委員会を作ったとしても、そのトップはきっと男性になるでしょう。情報の伝達方法がこれまでと変わり時間がかかってしまう恐れがある。内容を理解していない人が組織運営にかかわることも考えられます。」

私たちとしてはきちんと仕事をしてくれる人が欲しいのであって、肩書きだけの人はいません。女子選手の数は総体的に少ないのだから、ばらばらにしてほしくない。積み上げてきた実績を、そのままの形で認めてほしいのです」

—以前、小学生の女の子がラグビーをしているのを見たことがありますか、日本協会として女子ラグビーの普及活動などはしているのですか。

「特にしていません。ただ、ラグビー全般の普及を目的に、全国を回るラグビーカーニバルをやっています。それを担当している男性たちは私たちにも声をかけてくれるので、女子連盟からコーチを派遣し、女の子たちを指導したりすることはあります。」

女子ラグビーの普及や選手の育成というのは、やはりそれに直接かかわってきた者でないとわからない部分があると思います。女性がラグビーをどうとらえているか。



▲初心者講習会でのパス練習



▲「リバティフィールズ」のチームメイト

なぜ、ラグビーを継続する女性が増えないのか。ラグビーが当たり前のものとしてあった環境にいた人たちには、女子ラグビーの現状を把握、理解するのは正直、難しいと思います」

—例えば子供たちにラグビーを指導していて、男女の反応の違い等を感じることはありますか。

「身体的には瞬発力や柔軟性、持久力が違います。以前、女子中学生に指導をするのだがマニュアルはないか、との問い合わせがありました。その時は初心者講習会で使ったものをリニューアルして送りました。指導に関してはそれほど男女の違いを気にすることはないと思います。ただ、コンタクト（接触プレー）やある程度のレベルになったら、男女を分けて指導する部分も必要かと思っています。」

女子のトップクラスを指導する男性が、『女性は話を熱心に聞かし、変なプライドもないので教えやすい』と言っていました」

—今後の課題や希望をお聞かせください。

「まず、女子選手の数を、（現在の400人から）500人にしたい。これからは女子連盟だけでなく、例えば地域のスポーツクラブなども協力しながら活動できれば良いと思います。」

また来年の2月には7人制の大会（埼玉・熊谷ラグビー場）を予定しています。その際にはシンガポールや香港などのアジアの国にも呼びかけ、国際的な大会にしたいと思っています」

◇

女子連盟設立当初からのスクラップや、大会プログラムなどの膨大な資料をまえにお話くださった岸田さん。毎年開催する女子ラグビー交流大会のプログラムに掲載する広告集めも、一件一件ご自身でなさるそうです。女子ラグビーを心から愛し、支えていることが、とても強く伝わってきました。

（8月24日取材・聞き手/WSFジャパン事務局長・高橋昭子）

# Women's sports

## 「女性スポーツの現在」

—シンポジウムからの報告

萩 裕美子

8月7日、国立婦人教育会館主催事業として「女性学・ジェンダー研究フォーラム」が開催され、ワークショップの一つとして「女性スポーツの現在」と題したシンポジウムが行われました。今回は、司会・進行をつとめた萩裕美子さんにその報告をしていただきました。

### ■はじめに■

このシンポジウムは「NPO法人ジュース」(JWS=スポーツに関わる女性を支援する会)と「京都スポーツと女性フォーラム」の共同実施で行ったものです。以下、簡単に内容をまとめてみました。

### ■シンポジウム概要■

女性スポーツの現在を明らかにするために「研究」「社会学」「教育」「世界の動き」という視点で、4人の演者から15分ずつ現状報告と問題提起が行われました。

#### 1. 「近年の女性スポーツ研究の動向」

— 来田亨子氏 (中京大学)

「研究」の視点から、来田氏はSPORT Discus (カナダにある世界最大のスポーツ・レジャー・データベース) をもとに、1960年から1999年3月までの女性スポーツ研究の動向を紹介されました。今回はキーワードを中心にその量と質がまとめられ、それによると「数的な変化よりも取り扱う研究内容が広がっている」ことが特徴として示されました。

また、女性スポーツ研究全体はこれまで「産む身体」として着目されてきましたが、1985年以降は「強制的な性の両極化からの解放を可能にする身体」としてとらえられるようになりました。その結果、スポーツ科学の分野からの思考が始まったようです。

「研究」の動向を通じて女性スポーツのこれまでの変遷と傾向が明らかとなり、今後の方向性が示唆された発表でした。

#### 2. 「文部省体力テスト」がつくる「体力の男女差」

— 飯田貴子氏 (帝塚山学院大学)

「社会的」視点では、飯田氏が「男女の区別は差別につながる」という問題を、文部省スポーツテストを事例に話されました。この「スポーツテスト」は体力を評価するものとして実施されてきました。しかし、飯田氏は「体力の定義自体が競技スポーツを意識したもので、そこには男性優位がすでに潜んでいるのではないかと。近年の体力テストの改正では、健康関連体力への移行が見られるが、ジェンダー分析の視点が欠落しているのでは

ないか」と、疑問を投げかけました。また、高校生・大学生の体力観等の調査結果からは、「スポーツテスト」に潜むジェンダーバイアス(性差に対する社会的偏見)について考えさせられ、とても興味深い話題でした。

#### 3. 「学校体育における男女共同参画の現状と課題」

— 井谷恵子氏 (京都教育大学)

「教育」では現場の視点から、井谷氏が学校体育を「教科体育」と「特別活動」に分けて話題を提供されました。「教科体育」では学習指導要領が取り上げられ、これまで何度も改定されているものの、「ジェンダーバイアス」という視点で見ると大きな変革は遂げていない」という指摘がありました。また現在、男女共習がすすめられていますが、現場では様々な問題点があり、その是非についても検討されています。

「特別活動」では、高校体育連盟の加盟種目を取り上げ、「そこにも男女差が見られるが、近年の傾向で徐々に男女差の幅は狭くなってきているのではないかと」との見解が述べられました。最後に今後の学校体育の中でどのように男女共同参画を推進していけばよいかについて、5つの提案が出されました。

#### 4. 「世界の女性スポーツの動向」

— 小笠原悦子氏 (JWS)

「世界の動き」については、小笠原氏(写真=中央)がここ数年の国際的な動きを紹介されました。日本では今年6月に男女共同参画社会基本法が成立しましたが、このキッカケとなったのが、1995年に北京で行われた国連世界女性会議の「北京宣言」です。スポーツ界でも1994年に第1回世界女性スポーツ会議(英国・ブライトン)が開かれ、「社会とスポーツにおける公平と平等」を盛り込んだ「ブライトン宣言」が発表されました。日本がこの宣言を実現していくためには、「まず世界の動きについての情報をできるだけ早く共有する必要がある」ということでした。



JWSは、そのためにインターネットを利用して最新情報を提供していることが紹介されました。

### ■参加者との意見交換■

参加者は体育・スポーツ関係者ばかりでなく、行政やNGO、ジャーナリスト等、大変幅の広いものでした。そのために様々な分野からの積極的な意見を頂戴することができましたが、ここでは紙面の関係で記載することができません。詳細はJWSのホームページ <http://www.jws.or.jp> を是非ご覧ください。

〈はぎ・ゆみこ〉 鹿屋体育大学体育学部生涯スポーツ学講座助教授

# Report

## シニアと一般体操活動

国際高齢者年の国際大会から

松本 迪子

国際高齢者年のこの夏、シニアの一般体操に関係深い2つの国際的なフェスティバルがヨーロッパで開催された。その概要をご報告したいと思います。

~~~~~ ☆ ~~~~~

「一般体操」とは、主に競技を目的としない体操分野を指す。人々は体や動きのエクササイズとして、また、動くことや共に活動することの楽しさを求めて体操をする。国際体操連盟(FIG)は4年に1回、一般体操の世界大会として世界体操祭(World Gymnaestrada)を開催している。

7月初めの1週間、スウェーデンのイエテボリで第11回世界体操祭が行われた。MGLA(体操リーダー連絡会議)はこの体操祭に初めてシニア28人を加え、「シニア」「一般の体操愛好家」「体操リーダー」からなる三層演技を持って、142人が参加した。体操祭の柱であるグループ単位の演技発表では、世界中から集まったグループが、15分に構成した演技を2回発表する。結果に勝敗はない。得点もメダルも、目に見える誇り得るものは何もない。しかし、発表を終えて退場してきたメンバーは、上気した顔にしばしば涙をためている。

今回、日本から参加したシニアのある男性メンバーは、嗚咽をもらすほどの深い感動を経験した。不安いっぱいでも臨んだ演技を無事終えることができた安堵のうえに満場の拍手を受け、そのうれしさに思わず嗚咽したのである。彼は後に、「人生で味わった最高の喜びだった」と記した。

シニアを含むこの三層演技の渡欧を実現するまでには、これまでに乗り越えてきた2つの「踏み台」が役立っている。1つ目は、今年で17回を数えるMGLA主催の「体操フェスティバル OSAKA国際大会」である。日常の健康づくり活動に参加している人々が、年に1度のフェスティバルに発表の機会を得ることで、単調な日常生活に共通の目標を持つことになる。発表後の達成の喜びを共有する仲間づくりは、クラブの活動の強化にも役立っている。

2つ目の「踏み台」は、1997年に大阪で開催された「なみはや国体」である。この国体では、「体操フェスティバル」での発表経験を持つグループを中心に、開会式式典演

技への府民参加者を募集した。応募者たちは1年余りの練習を重ね、「シニア」「障害者」「幼児」「一般の体操家」「体操リーダー」それに「海外からの参加者」を含む六層演技を実現させた。この出場者の中からシニアと一般女性の有志、MGLAのリーダーが加わって、さらに1年半の練習を重ね、今回の世界体操祭での三層演技が完成したのである。

この1か月後の8月5日から8日まで、ドイツのザール



▲「シニアのためのスポーツ加齢第1回

ヨーロッパフェスティバル」(ドイツ・ザール)

イの町で、「シニアのためのスポーツとカルチャーの第1回ヨーロッパフェスティバル」が開催された。ドイツ体操協会とザールランド体操

協会の共催で、国際高齢者年のハイライト行事の一つである。一般体操の分野で50歳以上を対象とするシニアの国際大会が、どのような形で開催されるのかということに興味を覚えた。

基本方針は「形式的なセレモニーは行わず、興味深い催しと楽しめるプログラムで埋める」とのことであった。用意されたプログラムは、史跡を巡るハイキングや世界文化遺産となっている製鉄所跡の見学、講習会にワークショップなど多彩。ゲーム感覚で挑戦できる体力テストも大人気であった。

主会場は、町の中心に位置する広場に作られた大テント。発表用のステージの前には、縦長に机と長いすが何列も並ぶ。観客席では飲食自由。みんなソーセージなどを前にビールジョッキを傾けながら楽しんでいる。歌が始まれば客席にも歌声が満ちて、腕組みの列が揺れる。ステージ上の演技者の動きに呼応して観客も立ち上がり、会場全体が一つの生き物にでもなったかのように動きが広がる。共に歌い、体を動かすことを楽しみ、「夕べのプログラム」は夜10時過ぎまで続いた。

「素朴ながら、あったかい、参加者が楽しみ満足できるフェスティバルにしたい」との大会関係者の熱意があふれる大会であった。

〈まつもと・みちこ〉 WSFジャパン会員、帝塚山学院大学教授、MGLA(体操リーダー連絡会議)会長、体操フェスティバル'99 OSAKA 国際大会実行委員長

Column

女子がカバーする 日本レスリング界 福田富昭

日本の女子レスリングは昭和59年、日本レスリング協会の組織普及委員会の中に女子部が設置されたのが始まりです。あれから15年、数多くあるスポーツの中でも、本格的な女子格闘技といえば、柔道とレスリングぐらいだと思います。男子レスリングはそれより半世紀以上も前の4年、早大OBの故八田一朗先生が日本の柔道を強くするために外国の格闘技、レスリングを研究し、これを取り入れて協会を設立したのが最初です。それ以来、諸外国からこの格闘技を学び、強くなるためにはどんな困難も克服しようと、勝つために挑戦し続け、常にレスリングが一番強い国へ遠征しました。また、いろいろなトレーニングを重ねながら独特の練習法を編み出し、選手に不屈の精神力を植えつけました。

いわゆる八田イズムといわれる厳しい訓練に明け暮れ苦節30余年、39年の東京オリンピック大会で金メダル5個をとるといふ快挙を成し遂げたのです。それ以来、日

本レスリングは毎回オリンピックでは金メダルを取り続け、文字通り「レスリング王国・日本」を築き上げたのです。

しかし、この10年間、2回の大会（バルセロナ、アトランタ）では銅メダル1個しか取ることができず凋落状態です。その男子に代わって、今度は女子レスリングが苦闘に苦闘を重ね、わずか5年で世界チャンピオンを生むまでに



▲お家芸を支える女子選手に成長し、世界選手権大会では常勝、毎回、金メダルを取るようになりました。今、日本のレスリング界は男子の不振を女子がカバーしているといっても過言ではありません。しかし残念なことに、この女子レスリングはまだオリンピック種目に入っていません。

女子選手たちは1日も早く正式種目として採用されるよう望みながら、オリンピックでの金メダルの獲得を目標に練習に励んでいます。

〈ふくだ・とみあき〉 WSFジャパン会員、全日本女子レスリング連盟理事長

Enjoy Sport!

女子の組織作りがキッカケで クレー射撃のシューターに 伊藤澄子



私はクレー射撃を始めて25年以上になります。その前の私はクレー射撃協会の事務局の仕事についていましたが、選手の裏方の仕事ですから自分が銃を持つなど考えたこともありませんでした。それがある日、諸外国の関係書類に女性名を発見したことで一変しました。日本には女性シューターの影も見えない現状に奮発して銃を取得し、国内の女性シューターに声をかけ日本女子クレー射撃クラブの発起人の一人になったのがキッカケで、私も真剣なシューターの仲間入り。土日は銃を担いでの射撃場通いが生活の大部分を占めてしまったのです。それまでは事務局のある岸記念体育会館（渋谷区神南）の前のオリンピックプールで泳ぐばかりが私のエンジョイ・スポーツでした。

クレー射撃は、静止した標的を狙うライフル射撃とは異なり、飛ぶ鳥を想定して発射されたクレー（素焼きの皿）を散弾銃で撃ち落とし、その数を競うスポーツです。銃を用具とするので、体力や瞬発力が勝負と思われがちですが、単純動作が多い分、精神的なものが大いに影響してきます。始めたばかりのころは海外の大会を目指してハードな練習を続けた時期もありましたが、現在は月に1~2度の競技会を目標に楽しんでいます。水泳をするのも歩くのも、好きなクレー射撃のためのトレーニングにつながるの思い入れがあって、全ての励みの原点にしているのです。とうにシニアの域に入ってしまった私でも、十分に楽しめることがいいと思います。上記の理由で最近、週1回のスクエアダンスを始めましたが、これも一言では言い表せない奥深いものがあり、私のエンジョイ・スポーツになりそうな気配を感じているところです。（WSFジャパン会員）

Hot Line

会員の広場

♥財政難の影響を受けるスポーツ振興

宮本 慶子（東京辰己国際水泳場 職員）

私は社会教育主事として、都のスポーツ振興を仕事としています。皆さんもご存知のとおり、各自治体は財政



難で四苦八苦の状況です。予算は毎年削減され、今まで実施してきた事業も大幅に見直し、縮小や廃止が相次いでいます。税収の落ち込みと、バブル期にゼネコン型の施策を行ってきたことのツケがきているのでは

左側前が2人目 ないでしょうか。やはり弱いところに犠牲が強いられるようです。「スポーツは余暇に趣味で行うもの、生きるために必要不可欠とはいえない」という考えが根底にあるのでは…。

スポーツ界はJリーグの低迷、実業団スポーツ部の相次ぐ撤退など、同じように財政が原因となって厳しい状況が続いています。これらを打開するには、どのような方法があるのか？ お金がないとスポーツはできないわけではないはず。そして、自分ができることは何か？ このようなことを最近、いつも考えています。

そればかりでは楽しくないので、自らスポーツで気分転換をしています。そしてテレビ等で見るすばらしいプレーは感動を与えてくれます。女性スポーツ選手の活躍と女性スポーツの発展を心から願って…。（東京都大田区在住）

♥学ぶことが多い子供たちの指導

細 眞美子（バスケットボール 指導者）

小学6年生の時、男子だけだったバスケットボール部に入部を許可してもらって以来、バスケットボールとの付き合いが続き、現在では私立の小学校と近所の養護施設の子供たちにバスケットボールを教えています。軽い気持ちで引き受けたのですが、教えることの楽しさ、難しさを味



わいながら、学ぶことの方が多いというのが実感です。忙しくて十分な準備ができずに練習をした時は、子供たちが言うことを聞かず、さんざんな思いをしました。反対に子供たちのことを思いながら準備をした時は、練習もスムーズに運び、子供たちも満足してくれます。

子供でもごまかしがきかないことを痛感し、指導者の内的姿勢の大切さを、身をもって知ることができました。子供たちは言葉よりも見て覚えるので、きちんとした見本を見せることも重要です。少し難しいと思っても子供たちはいつの間にか自分のものにしてゆきます。

スポーツの経験が彼らの成長に役に立ってくれることを願いながら、動きのぶくなった体にムチ打って頑張っています。（東京都大田区在住）

♥女性のパワーを発揮しよう！

原 悦子（日本陸連女性競技（連絡協議会））



現在、高校の体育の教員をしています。そのかわり陸連の中の女性の専門委員をまとめたり、女性の地位向上のためにイベントをしたり、女性のための競技会を開催したりしています。

日本陸連の組織が変わり、今まで存在していた「女子委員会」が消滅して、新しく「女性競技連絡協議会」という形になってスタートしました。説明によると、女性が女性を名乗っていること自体、真の平等と言えないということらしいのです。

しかし、実際にはまだまだ女性のために門戸は大きく開かれていないのが、現実なのです。結婚しようが出産しようが（もちろんしていなくても）、そのあたりの事を大きく考えてもらった上で、活躍の場をもらいたいのですが。

先日、全県から女性委員を集め、全国会議を開催しました。そのとき感じたのは「女の人のパワーはすごいぞ」ということです。まだまだ、新しい組織で何がやれるかは分かりませんが、女性のパワーを集結し、少しでも皆さんの役に立てればいいなあと、思っています。

WSFジャパンの活動には本当に全く協力していませんが、申し訳なく思っていますが、こうして陰ながらやっているのをお許してください！（神奈川県横浜市在住）